

# 源氏物語における助動詞キの会話文・ 心話文・消息文での文末用法 (1)

——終止形キの用法を中心に——

西 田 隆 政

## The Auxiliary Verb *ki* in Final Position for *kaiwa-bun*, *shinwa-bun* and *shōsoku-bun* in *The Tale of Genji*

——Focusing on the Use of the Terminal Pattern *ki*——

NISHIDA Takamasa

**Abstract :** Nishida (2005) presented an investigation into the use of the Auxiliary Verb *ki* at the end of sections of *The Tale of Genji*. Following on from this research, the present paper investigates examples of the Auxiliary Verb *ki* in terminal position with *kaiwa-bun*, *shinwa-bun* and *shōsoku-bun*. The focus is mainly on the usage of the terminal pattern *ki* at the end of sentences. This research shows that for *kaiwa-bun* there are more cases of the terminal pattern *ki* than for ends of sections of the novel. Furthermore, various usages arise from the fact that it can be an example of the end particle *kashi* or an interrogative form. In addition, although there are not many cases, the basic usages for *shinwa-bun* and *shōsoku-bun* resemble those for *kaiwa-bun*.

**要旨：**西田（2005）では、源氏物語における地の文文末での助動詞キの使用例の調査をおこなった。それをふまえて、本稿では、会話文・心話文・消息文の文末での助動詞キの使用例の調査をおこない、おもに終止形キの文末使用例の使用傾向について、検討をおこなった。その結果として、会話文では、地の文よりも終止形キの文末の使用例がおおきく、さらには、使用例のパターンも、終助詞カシの下接例や疑問文での使用例がある等のように、より多様であることがあきらかとなった。また、心話文・消息文においては、使用例はおおくないものの、基本的な使用例の傾向は、会話文に通じるものであった。

### 1 はじめに

源氏物語における助動詞キの使用については、地の文と会話文などの物語中の引用文とでは、その使用傾向に差異が存在する。西田（2005）では、以前におこなった西田（2002）の調査をふまえて、助動詞キの地の文文末での使用傾向を検討した。

それをふまえて、この論文では、会話文・心話文・消息文での助動詞キの終止形キの文末での使用傾向を調査し、地の文との差異を検討することにした。

### 2 地の文キの文末使用例

西田（2005）で、源氏物語の地の文での助動詞キの文末を調査した結果、その使用例は、終止形キが7

例、連体形シが6例と非常に使用例がすくなく、さらにキの文末とシの文末とでは、その使用傾向に差異があるとかがえられる。以下、使用例をあげる<sup>1)</sup>。[1]から[3]までキの例、[4]から[6]がザリキの例、[7]がニキの例である。

[1] 御はらからのみこたち、むつまじうきこえたまひし上達部など、はじめつかたはとぶらひきこえたまふなどありき。 (「須磨」427-4)

[2] おもひのほか、かなしき道にいでたちたまひしかど、つひにはいきめぐりきなむと、かつは、おほしなくさめき。 (「明石」469-6)

[3] 院にも、かのくだりたまひし大極殿のいつかりし儀式に、ゆゆしきまでみえたまひし御かたちを、わすれがたうおほしおきければ、「まゐりたまひて、齋院など御はらからの宮々、おはしますたぐひにて、さぶらひたまへ」と、御息所にもきこえたまひき。 (「濤標」511-8)

[4] はじめより、おしなべてのうへ宮づかへしたまふべききはにはあらざりき。 (「桐壺」6-8)

[5] 心にまかせて、みたてまつりつべく、人もしたひざまにおほしたりつる年月は、のどかなりつる御心おごりに、さしもおほされざりき。

(「賢木」336-9)

[6] まゐりたまへるまらうどども、ただあげぐれのけぢめしなければ、あながちに目もたたざりき。

(「薄雲」609-9)

[7] 齋院は御ぶくにておりゐたまひにしかば、朝顔の姫君は、かはりゐたまひにき。

(「賢木」347-5)

これら7例のおおきな特徴は、いずれもが物語の「今、ここ」の時点に対する過去<sup>2)</sup>となっている点である。たとえば、[1]では、須磨に蟄居していた光源氏と、皇子たち上達部は当初手紙のやりとりをしていたが、物語の現時点では、弘徽殿の太后をはばかり、それはすでに過去のことであるとする。「はじめつかた」と現時点を対比する時点が明示されるのも、そう理解する根拠となる。同様に、[2]では「かなしき道にいでたちたまひし」とき、[3]では「いつくしかりし儀式」、[4]では「はじめより」、[5]では「おほしたりつる年月」、[7]では現時点で「朝顔の姫君」は齋院となっている、というように、対比する過去の時点が明示されている。

それに対して、係り結びの文末となるシの場合は、まったくことなった傾向をしめす。以下の6例は、いずれも係助詞ゾとの係り結びの例である。

[8] これやこのはらだつ大納言のなりけむとみゆれ。かたへはひがごとにもやありけむ。かやうに、ことなるをかしきふしもなくのみぞあなりし。 (「宿木」1780-5)

[9] 御かへりはいかがなど、きこえにくくおほしたれど、ことごとしくおもしろかるべきをりのことならねば、ただ心をのべて／そむく世のうしろめたくはさがたきほだしをしひてかけなはなれそ／などやうにぞあめりし。

(「若菜上」1067-10)

[10] 「かたちさへあらまほしかりきや」など、なま心わろきつかうまつり人は、うちしのびつつ、「うるさげなる御ありさまよりは」などいふもありて、いとほしうぞみえし。

[11] 上の町も、上臈とて、御口つきどもは、ことなることみえざめれど、しるしばかりとて、ひとつふたつぞとひききたりし。

(「宿木」1799-11)

[12] 七月にぞ后ゐたまふめりし。

(「紅葉賀」262-1)

[13] その日の御装束どもなど、こなたの上なむしたまひける。祿どもおほかたのことをぞ、三条の北の方はいそぎたまふめりし。

(「若菜上」1086-11)

おなじ助動詞キの文末での使用例でも、連体形シのばあい、いわゆる「草子地」とみなせるような、語り手の「今、ここ」からの過去<sup>3)</sup>の例がその大部分をしめる。たとえば、[8]では、直前の帝や薫らの歌のやりとりのあとで、それを語り手の視点から「歌はそれほどのものではない」と批評している。

ただ、[12]と[13]のメリシの例は、文の叙述内容だけでは「草子地」ともかんがえにくい。藤壺の立后や光源氏四十の賀は、物語の中心的話題というべきものである。しかし、これらがメリシと断定的ではなく、「～のようだった」と婉曲的にのべたことからすると、おなじ過去でも語り手の確信性のない判断がふくまれるものともなる。高山(2002)の指摘のように、さらに検討が必要な例である。

以上みてきたところからすると、源氏物語の地の文での助動詞キの文末使用例は、終止形キと連体形シとでは、あきらかに使用傾向に差異があり、前者が物語の現場での過去の時点、後者が語り手の現在の視点からの過去の時点となる。西田(2005)では、このような使用傾向について、地の文での係り結びの使用傾向という観点から、助動詞キの「直接体験」とされる意

味の問題に検討をすすめたが、次章以下では、その際検討しなかった、会話文等における助動詞キの使用について、みていくことにしたい。

### 3 会話文キの文末使用例

源氏物語でのキの文末使用例を、使用文体ごとに整理したのが、下の表1である。

表1<sup>4)</sup>

	キ	シ	シカ	計
地の文	7	6	0	13
会話文	66	136	34	236
心話文	3	16	5	24
消息文	2	4	0	6
和歌	8	6	0	14
計	86	168	39	293

この表から理解されるように、会話文等では、連体形シの例が地の文よりも使用比率がたかい。これは、西田(2002)でみた、助動詞ツ・ヌ・タリ・リと同様の使用傾向である。以下、会話文から、使用例をみていくことにしたい。[14]から[40]例は、キが単独で動詞に接続する例である。

[14] かく御消息ありき。(「橋姫」1532-13)<sup>5)</sup>

[15] 日ごろ、いとみじくものをおぼしいるめりしかば、かの殿の、わづらはしげに、ほのめかしきこえたまふことなどもありき。

(「蜻蛉」1935-10)

[16] おのが寺にてみし夢ありき。

(「手習」1994-5)

[17] このふたつのことをおもうたまへあはするに、わかきときの心にだに、なほさやうにもいでたることは、いとあやしくたのもしげなくおぼえはべりき。

(「帚木」55-6)

[18] 文才をばさるものにていはず、さらぬことのなかには、琴ひかせたまふことなむ一の才にて、つぎには横笛、琵琶、箏の琴をなむつぎつぎにならひたまへると、うへもおぼしのたまはせき。

(「絵合」572-9)

[19] 昨日ほのかにききはべりき。

(「蜻蛉」1945-5)

[20] いづことては、おはしつるぞ。まろははやうしにき。

(「夕霧」1363-9)

[21] かきなれたる手して、口とくかへりごとな

どしはべりき。(「夕顔」107-6)

[22] かの国はなれたまふとても、おほくの願たて申したまひき。

(「玉鬘」730-14)

[23] みるめもこともなくはべりしかば、このさがな者をうちとけたるかたにて、ときどきのかくろへみはべりしはどはこよなく心とまりはべりき。

(「帚木」53-6)

[24] 川ちかきところにて、水をのぞきたまひて、いみじうなきたまひき。

(「手習」2043-9)

[25] みしかば心地のあしきなくさみき。

(「若紫」179-1)

[26] いささかのことのあやまりもあらば、かろがろしきそしりをやおはむとつみしだに、なほすきずきしき咎をおひて、世にはしたなめられき。

(「梅枝」990-10)

[27] はやう、まだ下臈にはべりしとき、あはれとおもふ人はべりき。

(「帚木」48-8)

[28] さすがに口とくなどははべりき。

(「帚木」61-4)

[29] 昨夜も、御遊びにかしこくもとめたてまつらせたまひて、御気色あしくはべりき。

(「夕顔」130-12)

[30] 去年の夏も世におこりて、人々まじなひわづらひしを、やがてとどむるたぐひあまはべりき。

(「若紫」151-4)

[31] おもふかたは、ことにはべりき。

(「横笛」1279-9)

[32] つれづれなるまぎらはしにもとおもひて、さいつころ、宇治にものしてはべりき。

(「宿木」1716-11)

[33] 一日、かの母君の文はべりき。

(「東屋」1841-10)

[34] 一昨年秋も、ここにはべる人の子の、ふたつばかりはべしをとりて、まうできたりしかども、みおどろかずはべりき。

(「手習」1992-6)

[35] いかでうしろやすくもみたまへおかむと、あけくれかなしくおもうたまふるを、少将殿におきたてまつりては、故大將殿にも、わかうよりまゐりつかうまつりき。

(「東屋」1801-2)

[36] いとしのびてみそめたりし人の、さてもみつべかりしけはひなりしかば、ながらふべきものとしもおもひたまへざりしかど、なれゆくまににあはれとおぼえしかば、たえだえ、わすれぬものにおもひたまへしを、さばかりになれば、うちたのめる気色もみえき。

(「帚木」56-2)

[37] みき。 (「帚木」71-9)

[38] さることみき。 (「若菜下」1202-13)

[39] さて、またおなじころ、まかりかよひしところは、人もたちまさり、心ばせまことにゆゑありとみえぬべく、うちよみ、はしりかき、かいひく爪音、手つき口つき、みなたどたどしからず、みききわたりはべりき。 (「帚木」53-4)

[40] みしほどまでは、ひとりものはものしたまひき。  
(「手習」2045-12)

[14] から [16] が「あり」, [17] が「おほゆ」, [18] が「おほしのたまはす」, [19] が「きく」, [20] が「しぬ」, [21] が「す」, [22] が「たて申す」, [23] が「とまる」, [24] が「なく」, [25] が「なくさむ」, [26] が「はしたなめらる」, [27] から [34] が「はべり」, [35] が「まるりつかうまつる」, [36] が「みゆ」, [37] と [38] が「みる」, [39] が「みききわたる」, [40] が「ものす」である。17種27例であるが、存在動詞の「あり」と「はべり」の例が計11例と、使用例がおおい。

[41] から [47] は、形容詞にキが単独で接続する例である。

[41] ことごとしくもてなしたまはざりけるを、いみじくかなしびたまふなり。はじめの、はた、いみじかりき。 (「手習」2043-6)

[42] 故六条院の、踏歌の朝に女方にて遊びせられける、いとおもしろかりき。  
(「竹河」1491-11)

[43] さてもすぐしはてねば、たつときものうく心とまる、くるしかりき。 (「松風」589-11)

[44] 執念かりき。 (「梅枝」991-14)

[45] われはしか、へだつる心もなかりき。  
(「夕顔」138-2)

[46] かしこき上の人々おほくて、その心ざしをとげて、御覧ぜらるることもなかりき。  
(「若菜上」1030-1)

[47] うるはしくおもりかにて、そのことのあかぬかなとおほゆることもなかりき。  
(「若菜上」1166-1)

[41] が「いみじ」, [42] が「おもしろし」, [43] が「くるし」, [44] が「執念し」, [45] から [47] が「なし」で、4種6例である。

[48] 親もなく、いと心ほそげて、さらばこの人こそはとことふれておもへるさまらうたげなりき。  
(「帚木」56-7)

[48] は形容動詞「らうたげなり」にキが単独で接

続する例である。以上、キが単独で接続する例は、合計34例である。つぎに、複合形の例をあげる。

[49] いかくはおもひきこえざりき。  
(「横笛」1269-11)

[50] いかく地の底とほるばかりの氷ふり、雷のしづまらぬことははべらざりき。  
(「明石」442-7)

[51] 本才のかたがたのものおしへさせたまひしに、つたなきこともなく、またとりたててこのことと心えることもはべらざりき。  
(「絵合」571-9)

[52] かくてさぶらふこれかれも、年ごろだに、なにのたのもしげある木のもとのかくろへもはべらざりき。  
(「総角」1590-13)

[53] そののち、音にもきこえじとおほしてやみにしを、いかでかきかせたまひけむ、ただ、この二月ばかりより、おとづれきこえさせたまひし。御文はいとたびたびはべめりしかど、御覧じいることもはべらざりき。  
(「蜻蛉」1955-9)

[54] 雲のうへちかくては、さしもみえざりき。  
(「竹河」1490-14)

[55] 弁もはなれぬ仲らひにはべるべきを、そのかみはほかほかにはべりて、くはしくもみたまへなれざりき。  
(「宿木」1763-9)

[49] から [55] までは、ザリキの例である。[49] が「おもひきこゆ」, [50] から [53] が「はべり」, [54] が「みゆ」, [55] が「みたまへなる」で、4種7例である。

[56] もしみたまふこともやはべると、はかなきついで作り出でて、消息などつかはしたりき。  
(「夕顔」107-6)

[56] はタリキの1例である。動詞「つかはす」に接続する。

[57] いとねぶたし。昨夜もすすろにおきあかしてき。  
(「浮舟」1872-1)

[58] もとよりおくれたるかたの、いとどなかなかうごきすべくもみえざりしかば、むつかしくてかへしてき。  
(「玉鬘」756-5)

[59] その世の罪はみな科戸の風にたぐへてき。  
(「朝顔」642-12)

[57] から [59] はテキの3例である。それぞれ「おきあかす」「かへす」「たぐふ」に接続する。

[60] いみじきことをきこえさせはべりて、いでさせはべりにき。  
(「蜻蛉」1955-5)

[61] 故宮の御忌日は、かの阿闍梨にさるべきこ

とどもみないひおきはべりにき。

(「宿木」1718-11)

[62] 侍従といひし人は、ほのかにおぼゆるは、五つ六つばかりなりしほどにや、にはかに胸をやみてうせにき。 (「橋姫」1540-5)

[63] 親たちははやうせたまひにき。

(「夕顔」138-11)

[64] 御かたは、はやうせたまひにき。

(「玉鬘」735-3)

[65] うせたまひにき。 (「手習」2042-12)

[66] かしらおろしはべりにき。

(「手習」2035-1)

[67] 昨日、御車いてかへりはべりにき。

(「宿木」1713-8)

[68] 心のをさなかりけることは、よろづにものつつましかりしほどにて、えたづねてもきこえですぐししほどに、少弐になりたまへるよしは、御名にてしりにき。 (「玉鬘」740-2)

[69] わが身にてもしりにき。

(「東屋」1806-14)

[70] いかになりたまひにき。 (「夕顔」134-6)

[71] こよなくおもひけちたりし人も、なげきおふやうにてなくなりにき。 (「藤裏葉」1008-5)

[72] 一日まゐりて、いでたまふほどなりしかば、えをらずなりにき。 (「東屋」1837-12)

[73] さて、われもすみはべらずなりにき。

(「浮舟」1912-8)

[74] 東の御方は、ものまうでしたまひにきとか。 (「手習」2027-4)

[75] まかり申ししに、殿にまゐりたまへりし日、ほのみたてまつりしかども、えきこえで、やみににき。 (「玉鬘」740-3)

[60] から [75] はニキの例である。[60] が「いづ」、[61] が「いひおく」、[62] から [65] が「うす」、[66] が「おろす」、[67] が「かへる」、[68] と [69] が「しる」、[70] から [73] が「なる」、[74] が「ものまうです」、[75] が「やむ」で、9種16例である。

[76] 院も、ことのついでに、もし世のなかおもふやうならば、ゆゆしきかねごとなれど、尼君そのほどまでながらへたまはなむと、のたまふめりき。 (「若菜上」1100-1)

[77] 「いで、この葛城の神こそさがしうしおきたれ」とむつかりて、もののぞきの心もさめぬめりき。 (「夕顔」112-2)

[76] は「のたまふ」とメリキ、[77] は「さむ」とヌメリキの例である。

[78] されど、大原野の行幸に、上をみたてまつりたまひては、いとめでたくおはしけりとおもひたまへりき。 (「藤袴」922-4)

[79] 前の世の契りつたなくてこそかくちをしき山がつとなりはべりけめ、親、大臣の位をたもちたまへりき。 (「明石」457-2)

[78] と [79] はリキの例である。ともに敬語の補助動詞「たまふ」を介している例で、動詞は [78] が「おもふ」、[79] が「たもつ」である。

これらのキの複合形での使用例は32例であり、単独での34例とほぼ同数である。上接する助動詞は「ず(ざり)」「たり」「つ」「ぬ」「めり」「り」の5種である。動詞の種類は25種で、単独での使用例が存在動詞に集中するのは相違し、おおくの種類動詞に接続する。そのなかで、助動詞ヌとの使用では、「うす」(4例)「なる」(4例)と変化動詞の例がおおい。

会話文でのキの使用例は、地の文での使用例と比較すると、その使用例がおおいだけでなく、使用例のパターンも多様である。とくに、メリキの例は、地の文では係り結びでのメリシしか使用されず、会話文では「婉曲」的に過去の事態をのべる例がキで使用可能であるのは、地の文と会話文での終止形キの使用範囲のちがいをしめすものといえよう。

#### 4 会話文キ+終助詞の文末使用例

キの文末には、終助詞の下接する例がある。地の文にも、つぎの2例がある。

[80] 齋院は御服にておりるたまひにきかし。

(「朝顔」639-1)

[81] まことや、かの衛門督は中納言になりにきかし。

(「若菜下」1172-1)

ともに、ニキカシでの使用例であるが、地の文ではいわゆる「草子地」ともされる、語り手の視点から批評的にのべられている文である。

会話文には [82] から [93] までの例がある。

[82] ただ、朝夕にもてつけたらむありさまにみえて、心くるしかりしかば、たのめわたることもありきかし。 (「帚木」56-6)

[83] なほ昔よりたえずみゆる心ばへ、えしのばぬをりをりありきかし。 (「柏木」11254-1)

[84] 人柄のをかしかりしも、ところがらにや、

めづらしうおほえきかし。 (「濤標」492-10)

[85] あやしくて、おはしところたづねられたまふ日もありときこえきかし。 (「浮舟」1909-11)

[86] 昨日今日といふばかり、春宮にやなどおぼし、われにも気色ばませたまひきかし。

(「蜻蛉」1976-5)

[87] 天下にいみじきこととおぼしたりしかど、東にてかかる薫物の香は、えあはせいでたまはざりきかし。 (「宿木」1784-7)

[88] それはかやうにしも、おもひよりはべらざりきかし。 (「柏木」1257-9)

[89] いとけとほくもてなしたまひて、くはしき御ありさまをみならすいたてまつりしことはなかりしかど、御まじらひのほどに、うしろやすきものにはおぼしたりきかし。 (「朝顔」655-5)

[90] 故院の御ときに、大後の、坊のはじめの女御にていきまきたまひしかど、むげの末にまゐりたまへりし入道の宮に、しばしおされたまひにきかし。 (「若菜上」1042-12)

[91] いかなる御心地ぞとおもへど、石山とまりたまひにきかし。 (「浮舟」1902-3)

[92] 宮のうちにおひいでて、帝王のかぎりなくかなしきものにしたまひ、さばかりなでかしづき、身にかへておぼしたりしかど、心のままにもおごらず、卑下して、二十がうちには納言にもならずなりにきかし。 (「若菜上」1031-12)

[93] はじめのはた、いみじかりき。ほとんど出家もしたまひつべかりきかし。

(「手習」2043-6)

[82] から [86] がキカシの5例、[87] から [93] が複合形の7例である。[87] と [88] がザリキカシ、[89] がタリキカシ、[90] から [92] がニキカシ、[93] がツベカリキカシである。

会話文では、話し手の「念を押す」意味<sup>6</sup>をもつカシが多用されるのは理解される場所であるが、下接しない例が66例に対する12例は、かなりたかい比率であるとかがえられる。

また、会話文には、疑問の意味をしめす係助詞やが下接する例も4例みられる。[94] から [97] までである。

[94] 頭中将の気色は御覧じしりきや。

(「藤袴」921-4)

[95] 昨夜、宮はまちよろこびたまひきや。

(「野分」869-7)

[96] いさや、ことなることもなかりきや。

(「帚木」56-7)

[97] かたちさへあらまほしかりきや。

(「竹河」1496-13)

[94] と [95] が動詞に下接する例、[96] と [97] が形容詞に下接する例である。いずれも物語中の話し手が聞き手に過去の事態について質問する例である。

このように、会話文のキが終助詞のカシや係助詞やと共にしやすいことは、会話文でのキが文末で多様な用法をもっていたことをしめすものである。これは、さきに西田(2005)で検討した地の文でのキの文末の用法とは一線を画するもので、2章でふれたメリキの使用例もふくめて、逆に、地の文でのキの使用が限定されたものであったことが理解されるのである。

## 5 心話文・消息文キの文末使用例

会話文につづいて、心話文と消息文のキの使用例を検討する。心話文は、[98] がタリキ、[99] と [100] がニキと助動詞のみでの使用例、[101] から [105] までがカシの下接する使用例である。

[98] たずねむとおぼしたりき。

(「若菜下」1127-12)

[99] 世におはせずなりにき。 (「竹河」1472-5)

[100] かたちをかへ、世をそむきにき。

(「夢浮橋」2060-1)

[101] まずはかの御簾のはさまも、さるべきことかは、かるがるしと大将のおもひたまへる気色、みえきかし。 (「若菜下」1202-1)

[102] えおはせざりしほどのなげき、いといとほしげなりきかし。 (「浮舟」1909-13)

[103] かの空蟬の、うちとけたりし宵の側目には、いとわろかりしかたちざまなれど、もてなしにかくされて口をしうはあらざりきかし。

(「末摘花」224-5)

[104] そのかみも、けちかくみきこえむとは、おもひよらざりきかし。 (「若菜下」1132-2)

[105] ゆゑありてもてなしたまへりし心おきてを、人はさしもみしらざりきかし。

(「幻」1414-10)

キの複合形が3例とカシが下接する例が5例である。使用例がすくないこともあり、会話文と比較すると、使用パターンは限定されているが、そのなかでは、カシの下接する例のおおいのが注意される。

3章でもふれたように、カシは話し手の「念を押す」意味とされるが、心話文のばあい、話し手と聞き

手は同一人物なので、自分自身に対して過去の事態を「そういうこと」と確認していることになる。たとえば、[101]は、柏木が、大将(夕霧)のおもっていた、女三の宮の「かるがるし」い欠点が、御簾のはさまのときにもみえたのだった、と今にして認識している例である。

消息文では、3例みることができる。

[106] 一日の御ことは、阿闍梨のつたへたりし

に、くはしくききはべりにき。(「宿木」1735-1)

[107] かしこの寝殿、堂になすべきこと、阿闍梨  
にいひつけはべりにき。(「宿木」1765-2)

[108] 昨日、上はみたてまつりたまひきや。  
〔「行幸」888-7〕

このなかでは、[104]のヤの下接する例が注意される。手紙のなかで、光源氏が玉鬘に、帝を拝見なさったかと、質問している例である。使用例はすくないものの、地の文にはない疑問文の例のあることから、会話文に通じるものとみることができる。

心話文と消息文は、基本的に会話文と同様の傾向をしめすものとみてよいであろう。使用例のすくないこともあり、会話文ほどの使用パターンの多様さはないものの、地の文とはことなり、会話文によりちかい使用傾向とみることができる。

## 6 ま と め

本稿では、助動詞キの終止形キ使用例として、会話文66例、心話文3例、消息文2例と、終止形キに助詞の下接する会話文16例、心話文5例、消息文1例の計93例を検討してきた。その結果として、これらの使用例は、地の文での使用例よりも、使用数がおおいだけでなく、終助詞カシの使用や疑問文での使用等で、より使用範囲のひろいことが確認された。

地の文では、終止形キが基本的に物語の「今、ここ」の時点からの過去をしめすものであったのに対して、会話文等での終止形キは会話等の発話の時点から

の過去をしめすというだけでなく、そこに話し手の聞き手へのはたらきかけをしめす例があるという点で、より使用範囲がひろいということになる。

次稿では、この終止形キの使用傾向をふまえて、連体形シヤ已然形シカの文末での使用例について、検討していくことにしたい。

### 注

- 1) 源氏物語の引用は、池田(1953)による。その引用に際して、適宜、かなづかいをあらため、濁点をほどこし、漢字をあて、句読点をつけた。
- 2) 糸井(1995)の用語による。
- 3) 糸井(1995)の用語による。井島(2002)では「表現時」とし、ほぼ同義とかがえられる。
- 4) 表1には、終助詞カシや係助詞ヤの下接した例をふくんでいない。
- 5) 会話文等の引用では、一文ごとに引用し、「といふ」「とおもふ」等の引用をしめす部分は省略する。
- 6) 中村・岡見・阪倉(1982)でのカシの意味記述による。

### 参考文献

- 池田亀鑑 1953『源氏物語大成校異篇』1~3(中央公論社・調査は第9版による)
- 井島正博 2002「中古和文の表現類型」(『日本語文法』2-1)
- 糸井通浩 1981「源氏物語と助動詞「き」」(源氏物語探求会編『源氏物語の探求』6 風間書房)
- 糸井通浩 1995「中古の助動詞「き」と視点」(『京都教育大学国文学会誌』24・25)
- 高山善行 2002『日本語モダリティの史的研究』(ひつじ書房)
- 中村宗彦・岡見正雄・阪倉篤義 1982『角川古語大辞典』1(角川書店)
- 西田隆政 2000「助動詞「つ」「ぬ」と係り結び—源氏物語を中心に—」(『表現研究』71)
- 2002「源氏物語における「たり」「り」の文末用法—係り結びの使用頻度と文体差の関連をめぐって—」(『甲南女子大学研究紀要 文学・文化編』40)
- 2005「助動詞キと「直接体験」—地の文での係り結びの使用傾向をめぐって—」(『国語と国文学』82-11)